
煉獄の退魔士

藤浪一真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

煉獄の退魔士

【Nコード】

N5661Q

【作者名】

藤浪一真

【あらすじ】

桐生煉は退魔一族の名門「桐生家」の後継ぎとして産まれたが、退魔士としての能力を持たない「無能」だった。後継者にも退魔士にもなれない煉は一族から勘当されてしまう。それでも煉は必ず退魔士になり再び帰ってくることを誓い、去って行った。

それから7年後、煉は「篠宮煉」として退魔士になった。しかし、煉はただの退魔士ではない。煉は「鬼」の力を取り込んだ最強（凶）の退魔士なのである。

そんな煉が帰ってきたことで物語は始まる。

序章（前書き）

オリジナル小説を書くのは初めてで拙い文章になるかもしれませんが、よろしく願います。

序章

空に太陽が昇り、人々に一日の始まりを告げる。新しい日を迎えるもの、昨日と変わらない日々を送るもの。内容は様々である。

そして、ある少年にとっては新しい日を迎えた。とても大きな変化である。

家を出るのだ。

少年は家の門を出て、外から10年間を過ごした我が家を見つめた。家と言うが、実際は屋敷である。少年は伝統ある退魔一族の一人で次期当主となるべく厳しく育てられてきた。しかし、少年は当主になることは決してない。

なぜなら、少年は退魔士としての素質を全く持っていないのである。

少年の一族は人によって様々だが、だいたい3歳ぐらいになると術が使えるようになる。そこから訓練をして制御できるようになるのだが、少年は10歳になった現在でも術を制御することはおろか、発動させることすらできないのである。唯一持っているのは退魔士の命とも言える「霊力」だけである。それ以外は、普通の人間である。

少年の父親は、少年に人一倍厳しく修行をつけたが、能力が開花することはなかった。親族や分家のものたちは少年を「無能」と呼び、同年代の少年退魔士たちにいじめられていた。

父親は少年に絶望し、そして勘当^{かんどう}を告げた。母親も少年を庇うことなくこれに賛成し親戚や分家のものたちも反対せず、満場一致で少年は家を出ることを告げられた。しかし、一人だけ少年を庇うものがいた。――少年の姉である。

姉は親族会議が行われる直前まで断固反対していたが、決定されてからは何も言わなくなった。しかし少年にとっては、この上なく嬉しかった。一人だけでも自分のことを思ってくれている人がいる。

それだけで少年の心の支えとなっている。

そして今、姉は門の前で少年を見送っている。しかし、見送りに来ているのは姉一人だけである。それでも、少年にとっては十分だった。少年にしては少し大きいトランクを置き、姉の顔をまっすぐ見る。

「わかつているとは思うが、こうなったのはお前が能力を持っていなかったのが原因だ。恨むなら神や運命とやらを恨むことだな」

「ハハハ……」

姉の辛辣な言葉に、少年は苦笑いするしかなかった。姉は他人に厳しく自分にも厳しい人間なのである。

「ま、お前がこの道を諦めておらず、なおかつ生きていればまた会うこともあるかもしれん」

「そうだね……」

それからしばらく沈黙が続いた。聞こえてくるのは眠りから覚めた鳥のさえずりだけである。口を開いたのは少年だった。

「姉ちゃん……」

「なんだ？」

少年はこれまで以上の真剣な顔をして姉を見る。姉は顔色を変えず普段の厳しい顔つきで少年を見つめているが、内心は少し緊張していた。少年は深呼吸を一つして、告げた。

「俺、強くなるから」

「……！」

少年の言葉に、姉は少し目を見開いた。しかしそれも一瞬のことですぐに顔色を戻した。

「ほう。強くなる、か。弱虫で無能のお前がな？」

姉は挑発の言葉をかけるが、少年は動じなかった。

「強くなる。強くなつて一人前の退魔士になって、この街に帰ってくる」

少年は本気だった。

「お前にとって、それは過酷な道だぞ」

「わかってる」

「途中で妖魔どもに殺されるかもしれないぞ」

「退魔士に妖魔はつきもの、でしょ？」

一連のやり取りをして、姉は口元を緩めた。滅多に見せない姉の笑みだ。

「そうか。なら、せいぜい死なないことだ」

「うんっ！」

少年は一つ頷き、トランクを持ち上げた。

「それじゃ姉ちゃん、いつかまた……」

「ああ。またな」

こうして、10歳の少年は屋敷を去り、退魔士になるための修行の旅に出たのである。

もう7年も前の話である。

序章（後書き）

感想などお待ちしております。一言だけでもいただけると励みになります。

「ん……きて……」

遠くの方から声が聞こえる。

「……さ……さい」

また声が聞こえた。気のせいか妙な揺れを感じるが、それがまた心地よかった。

「れん…おき…くだ…」

声がだんだんはつきりと聞こえてくるようになってきた。あれ、今俺の名前が聞こえたような気がしたが……。

「れん…おき…ださ…」

やはりそうだ。誰かが俺の名前を呼んでいる。俺の名前は煉だからな。いやしかし、俺が呼ばれているとは限らない。他にも「れん」という名前の人を呼んでいるのかもしれない。例えば、最近ニユースでよく見る、何とか分けとかいうやつで注目されたあの女性は確か—

パシンッ！

「いてっ!？」

頬を叩かれた。テレビでお笑い芸人たちが罰ゲームでビンタされて大袈裟に痛がっているのを見るが、はじめてビンタを受けてその気持ちがあったような気がした。どうでもいいが、ビンタははじめてだが、グーで殴られたことはある。姉ちゃんとかじいちゃんとか親父とか。……家庭内暴力で訴えることができるんじゃない？

「煉さん、起きてくださいっ！もうすぐ着きますよ？」

そう言っただけを起す、もとい、俺にビンタした少女—たちはおほ橘詩帆が俺の前に立っていた。

「ん……。やっと着いたか……」

俺は大きなあくびをして体を伸ばす。

俺と詩帆は現在、新幹線に乗っている。目的は観光、と言いたい

ところだが全くの正反対。「仕事」である。しかもただの仕事ではない。分かりやすく言ってしまうと「悪霊退治」である。

日本は表向きは至って平和であるが、その裏では「霊魔」という化物が人々を襲っているのである。霊魔は夜にしか現れず、やつらは「門」を通り人間の世界へやってくる。霊魔は物に取り憑き襲いかかってくることもある。生きている人間にも取り憑くし、死体にも取り憑く。しかも、普通の人間の武器では倒せないから厄介である。

そこで俺たち「退魔士」の出番である。

「退魔士」は普通の人間にはない特殊な能力を持っている者たちである。歴史も長く、始まりは平安時代で現在も続いている。退魔士たちは術や特殊な武器を使って霊魔を殲滅する。例えば、陰陽師も退魔士の一つである。しかし、退魔士の存在は公におおやけされることはない。闇の存在である霊魔を相手にするのだから、退魔士も闇の存在だ。化物が街中で暴れているなんてことが報道されたらパニックになるだろうから、そこは権力という頼もしいものを使っているいろと規制をかけるのである。ちなみに退魔士の存在を知っているのは天皇と政府のほんの一部の人たちだけである。政府の中にも退魔士の機関は存在し、本部が京都にあるのだが当然極秘扱いである。

そして俺、篠宮煉はその“機関”所属の退魔士の一人なのである。とは言うものの、俺の所属は諜報部で仕事のほとんどが資料の整理というなんともつまらない、そして暇な部署である。こんな事を“機関”の人に聞かれたら、こっぴどく怒られるだろうな。上司は賛同してくれるだろうけど。

ちなみに橘詩帆も諜報部の退魔士で俺と同期である。しかし、詩帆は俺より一つ年下なのだ。年下の同期って個人的に複雑だ。まあ学校じゃないんだからそういうこともあると言われるとそこまでののだが。

そんな俺たちがなぜ、遠路はるばるやってきたのか。決まっている。上司に行けと言われたからだ。

「内職ばかりしてたら健康に悪いだろ？若いんだから、たまには外出て働いてこい」

そして言い渡されたのは「都内の退魔士と一緒に霊魔退治をしろ。期限はなし」いや、“機関”にはそういうの専門の部隊があるんだから、別に俺が行く必要ないですよ？しかも無期限って一生終わらないですよ？

一応反論してはみたが、我が上司様は権力というものが好きらしく「命令だ」の一言で解決してしまった。俺も出世できたら、そんなことしてみたいなあ。きっと部下はすごい嫌な目で見るだろうなあ。今の俺がそうだもん。

そんなわけで、俺と詩帆は都内にやってきたのである。詩帆は初めてなので窓から見える景色に目を輝かせていたが、一方の俺は複雑な気分だった。

俺は都内の生まれだが、家庭の事情で故郷を離れていた。はつきり言えば勘当されたのである。

俺の家は名門退魔一族の一つ「桐生」で、つまり俺の本名は桐生煉なのである。篠宮というのは俺を保護してくれたじいちゃんの名字だ。

桐生の次期当主として育てられたが、俺には致命的な欠陥があった。術が使えないのである。

桐生家の人間は、先祖代々伝わる術を持っている。個人差はあれ、だいたい5歳くらいで発動できるようになるのだが、俺は勘当される10歳になっても術を発動できなかった。ちなみに今でも発動できない。

これでは桐生の術を後世に残すことができないと判断した一族は俺を次期当主の座から下ろした。それからとにかくひどい目にあった。特に同年代の少年退魔士たちに受けたいじめが当時の俺には堪えた。今でもちよつとしたトラウマになっている。

そして先程言ったとおり、俺は勘当されてしまったのである。俺は田舎にいるじいちゃんの元へ行き、そこで5年間退魔士になるた

めの修行をした。そして俺はとんでもないものを手に入れてしまったのである。

「鬼」の力である。

退魔士になることがほぼ不可能と言われた俺が、退魔士になれた原因である。

どのようにして手に入れたのか、はつきりと覚えていないのだ。

どうしても退魔士になりたいとじいちゃんにすがったら「地獄の試練を受けてもらう」と言われたところから覚えているのだが、何をしたのかは記憶が曖昧になっている。しかし、俺は確かに「鬼」に会った。そして「鬼」に何かされたのも覚えている。その何かは覚えてないけど。そしてそこからまた曖昧になり、気が付くと布団の中で眠っていた。

そんなこんなで俺は退魔士になれたのである。そしてじいちゃんに薦められて3年前に“機関”に就職した。

俺の17年間の人生を簡単にまとめると、こんな感じた。こんな人生を送る17歳はそうそういないぞ。特に「鬼」に会ったところが。

ほどなくして新幹線は駅に着いた。いよいよ因縁の地での仕事が始まる。

「もしもし、俺です。……ええ、今着きましたよ」

俺は駅前で携帯をかけていた。相手は諜報部部長の門倉かどくら天司てんじ。俺たちの上司だ。

かつては最強の退魔士の一人で「神炎の獅子」と言われ法術では右に出るものは現在もない。特に炎系の術を得意としていた。しかし、“ある事件”で負傷してからは法術が全く使えなくなってしまう表舞台から姿を消した。そして現在、諜報部部長として活動している。術だけじゃなく武術でも強かった。今でも体は鍛えている

らしく、本人が言うには「いまだに喧嘩^{けんか}で負けたことはない」らしい。喧嘩は武術じゃないって。

「おう、そうか。じゃ、仕事の追加だ」

「……………は？仕事の追加？」

「ちよつと待つてくださいよ！退魔だけでもキツイのに、その上何しろって言うんですか！？」

退魔は夜遅くに行われる。明るいうちは昼寝をしたいのに。

「まあ聞けって。特にたいした内容じゃねえよ」

「じゃあやらなくてもいいですよね？」

「いや、やれ。これは命令だ」

あんた、いつか部下に刺されるぞ。俺は刺さずに斬るけど。

「お前たち二人は明後日『鎮守^{しずもり}高校』に入学してもらう。煉は二年、詩帆は一年だ」

「学校に通うんですか？“機関”で全部習って済ませたのに？」

“機関”では普通の学校と同じ内容の授業を受ける義務がある。

退魔士でも通常の教育は必要だ。しかし、一度習ったことをまた勉強するというのは、言っては何だが面倒だ。

「あたりめえだ。勉強だけじゃなく青春を謳歌する二度とないチャンスだぞ？むしろこんな機会を与えた俺に感謝しろよ」

何年も霊魔を狩っている人間に青春も何もあつたもんじゃないと思うんだが、悲観し過ぎか？ていうか、俺に感謝しろって……。斬りたくなってきた。

「で、お前たちの住居なんだが――」

しかも話が進んじやってる。いろいろとどうでもよくなってきたな。

「おい、聞いているのか？」

「ええ、聞いてますよ」

「お前たちの住居は鎮守高校近くのアパートだ。地図を今から送る。要件は以上だ」

「了解です」

通話が切れると、すぐに地図のデータが送られてきた。

アパートは確かに鎮守高校に近かったが、今俺たちがいる駅からは少し遠かった。疲れてるんだからその辺も考慮してほしかったなあ。

「部長からの要件は何だったんですか？はい、どうぞ」

連絡が終わったのを見計らったかのように、詩帆が声をかけてきた。しかもお茶まで買ってきてくれた。さりげない心遣いができる人間って素晴らしいよな。どっかの誰かさんとは大違いだよ。もちろん、部長のことだ。

「ありがとう。ああ、明後日から高校に通え、だつてさ」

「ほ、本当ですか！？」

詩帆の目が輝いていた。朝が早かったせい、目にくまが少しできてしまっているところが少し残念だ。俺もできてるんだろうけど。「私、高校に通ってみたかったです！中学卒業と同時に“機関”に入ったから諦めていたんですけど……。私、女子高生になれるんだあ」

そんなに喜ぶことか？別に俺も中学卒業してすぐに“機関”に入っただけ、あそこの教育所は普通の高校と変わらないような気がするぞ？違うところと言えば、授業内容に退魔関係のことを学ぶところか。それより気になるのは。

「詩帆。仕事しに来たこと、忘れてないよな？」

「もちろん忘れてませんよ。仕事も学校もがんばりましょう！」

さわやかな笑顔が俺にはまぶしく見えるぜ。目の下にくまが以下略。

「とりあえずタクシーでも拾ってアパートに行くか……」

「そうですね。ついでに学校も見に行きましょう！」

こうして俺たちは駅前で停まっているタクシーに乗って今日から住むことになるアパートへと向かった。

1 - 1 (後書き)

一人称視点と言うのですかね？こういう書き方を。

この形の書き方をするのは初めてなので、あまりうまくいっていると言っていないと思います。アドバイスがあればぜひ教えてください。
感想等もお待ちしております。

「えーっとですね……」

「……………」

俺は今、一人の女性に追い詰められていた。しかも、かなりピンチ。

なぜならその女性は木刀を持っているからだ。さらに言うなら、女性は制服を着ているが女子高生にしては大人びているように感じる。背は同年代にしては少し高い感じがする。スタイルもいい。出るところは出てる。髪は黒のストレート。すべてにおいて、俺の好みだ。―以上、俺の理想の女性像解説終了。

ふと女子高生の顔を見ると、彼女は少し顔を赤くしていた。はつきりしないから怒っているのか？

「あなた今、破廉恥^{はれんち}なことを考えていませんでしたか？」

「えっ、破廉恥！？」

スタイルについてどうこう思うのは破廉恥なのか？―というより破廉恥って言葉、久しぶりに聞いたな。最後に聞いたのはいつだったか。うーん、思い出せない。

「それよりも、あなたは何者ですか？校門の前で何をしているのです？」

おっと思うだ。俺は木刀女子高生に追い詰められているんだった。破廉恥について考えている場合ではない。―それより、木刀を人の顔に向けるな。危ないだろ。いや、そもそも何で木刀なんか持っているんだ？見た目とは違い、実は何かの族のリーダーなのか？

「どうしました、なぜ答えないのですか？……まさか、変質者？」

「ち、違えよ！」

まったく失礼な人だ。しかし、変質者と思われても仕方がないのかもしれない。何せ、校門前で立って校舎をじっと見ていたのだから。

なぜ俺が変質者呼ばわりされ、木刀で追い詰められているのか。
話は30分くらい前まで戻る。

俺と仕事の同僚の橘詩帆たちばな しほは退魔業のため、この街に引っ越してきた。

俺たちは駅からタクシーで上司に言われたアパートへと向かったのだが、詩帆が「学校を見たい」と言うので、アパートを後回しにして明後日から通うことになる学校「鎮守高校しんすこう」を見に来た。

―ところまではよかったのだが、問題はここからだ。
詩帆が勝手に校舎へ入ったのだ。

時刻は午後5時。土曜日ということもあって人が少ないからバれないだろうと思ったのだろう、このバカは。

俺は止めたぞ。そもそも俺は行きたくなかったのだ。なぜかって？ 疲れてるし眠いからだ。

俺の制止を振り切り、校舎へ入っていった詩帆の後を追おうとしたら、俺が木刀女子高生に見つかり、そして現在に至る。

さて、俺に与えられた選択肢は二つ。

一つは正直に話す。ようするに、明後日からここに通うものです、と言うのだ。変質者の方じゃないぞ。

もう一つは逃げるといふのががあるが、これはやめた方がいいだろう。

人前で普通の人間を超えた身体能力を見せてしまうと、いろいろと問題が出てくる。これから俺はあくまで学生の一人として、日常を送らなければならないのだ。少なくとも明るいうちは。目立つ行為はするなって上司に釘を刺されてるし。

「俺は、明後日からここに通うんです。だから、どんな学校なのかなどと思って見に来ただけです」

そついう訳で、俺は正直に話した。

「そ、そうでしたか……。それは、失礼しました」

女子高生はさっきまでの凜凜しい顔から申し訳なさそうな顔になり、木刀を下ろした。どうやら信じてくれるらしい。話が分かる人で助かったぜ。

「ですが、なぜコソコソとしていたのですか？あれでは怪しまれても仕方がないと思いますが……」

「……別にコソコソしてたつもりはなかったんですけど」

そんなに俺って怪しかったのか？なんかちよつと傷付くな。門の外から校舎を眺めていただけなのに。――充分怪しいか。

「私は、さかきほろみすず榊原美鈴と言います。三年生で剣道部の部長を務めています」

なるほど、剣道部だから木刀持っているのか。――あれ、そこは竹刀では？

「？どうかしました？」

「い、いえ、何でもないです……」

あまり深く問わないことにしよう。初対面だしね。それに墓穴を掘ることになるかもしれないし。

「俺はしのみやれん篠宮煉です。二年生でクラスは、えっと……まだ分かりません」

「篠宮君、ですか。ここで会ったのも何かの縁でしょう。覚えておきますね」

「煉さん、何してるんですか？中に入ってみましょう……って見つかってる！？」

榊原先輩との自己紹介が終わったところで、手を振りながら、こちらに向かってくる詩帆の姿が見えた。人前で大きな声で名前を呼ぶなよ。恥ずかしくなるだろ。

「あなたは？」

「あ、は、初めまして。私、橘詩帆と言います。明後日からこの学校に通うから見に来たんです！」

「え？あなたも？」

榊原先輩は少し驚いた顔で俺を見てきた。

あ、これはちょっとヤバいかもしれない。同じ日に二人も転校生が来るなんてことは、めったにないことだろう。兄妹とかだったら話は別だが、残念ながら俺も詩帆もフルネームで名乗ってしまった。つまり、兄妹という設定はもう通じない。―さて、どうしたものか。「二人はお知り合いなのですか？」

「はい！」

ぐはつ。詩帆のやつ、正直に言いやがった。正直なのは良いことだが、時には嘘も必要なきがあるんだぞ。バカ正直だけでは、社会で生き延びることはできないと俺は思う。悲観しすぎかな？

それはともかく、今はこの状況をどうにかしなければ。先輩の中では俺と詩帆は知り合いという設定が出来上がった。―ここは、出たとこ勝負だ。

「えっと、ついさっき知り合ったばかりです。彼女も学校を見に来たらしく、そこではったりって感じで……。いや、ものすごい偶然だなあって話もしてたんですよ」

わかってる。自分でも、これは苦しい言い訳だということとはわかってる。しかし残念なことに、俺は不器用な人間だ。嘘も必要だと言っておきながら、この様だ。こんなことになるのなら、直属の上司である天司^{てんじ}さんから上手い嘘のつき方のレクチャーを受けるべきだったかな。あの人の嘘はすごいからな。詐欺師も真つ青になるほどだ。詐欺師を騙すところを見たことないけど。ちなみに俺は何度も騙された。

そして詩帆よ。何を言ってるんだ、と言いたそうな顔をするのはやめろ。俺の気持ちを察してくれよ。それから、もう黙っててくれ。いや本当にもう、これ以上は個人的にヤバイ。

「そうですか。それは偶然ではなく、運命みたいなのを感じてしまいますね」

ええっ！？信じちゃったよ、この先輩。見ず知らずの人の言う事を簡単に信じるのは、どうかと思うぞ。

こんなこと言う俺って、心が汚れているのだろうか。心が綺麗だ

から、先輩は俺の言う事を信じるのだろうか。だとしたら、先輩に申し訳なくなってくる。

だからと言って本当のことを言うわけにはいかない。俺と詩帆は、ある意味“存在していない”のだから。

「それじゃ、俺はそろそろ帰ります」

何だかこの場に居づらくなってきたから、俺は帰ることにした。

「そうですか。ご縁があればまた会いましょう」

先輩は優しい笑みを浮かべながら、そう言った。俺にはその笑顔が眩しく見えた。

「……失礼します」

俺は一礼して学校を後にした。後ろから詩帆の「失礼します」という声が聞こえ、こちらに近づいてくるのを感じた。―他人という設定なのに一緒に帰ったら怪しまれるだろ。

腕時計を見ると、もうすぐ6時を迎えようとしていた。

まもなく逢魔おひまが時。“闇の住人”が動き始める頃だ。俺も詩帆も“闇の住人”として活動を始める。

「さて、狩りの準備をするか」

*

（不思議な人でしたね）

美鈴は二人の姿が見えなくなると、呟いた。

（ですが、ただの転校生ではないような気がします）

煉を見かけた時、拳動不審きょどうふしんのような態度だったので変質者かと思っただが、話をしてみると普通の男子生徒だった。

しかし一瞬だけ、煉が帰ろうとした時、本当に一瞬だけ“人ならざるもの”の気を感じた。ただの勘違いかもしれないが、煉からそんなものを感じた。

（それに悲しい目をしていた……）

美鈴は煉が背中を向ける直前、悲しそうな目をしていたことにも

気付いていた。

（もう少し、篠宮君と話をしてみたいですね）
そんな事を思いながら、ふと時計を見ると6時になるうとしていた。

（そろそろ帰った方がいいですね……）

美鈴は笑みを消し、凜凜しい顔になり、学校を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5661q/>

煉獄の退魔士

2011年2月10日13時40分発行